

引揚げ文学論の可能性と意義 — 帝国史とトランスナショナル・ヒストリーの視点から

浅野豊美

浅野と申します。早稲田大学にて日本政治史を担当しています。私は東大の駒場の国際関係専攻出身ですけれども、最近早稲田大学でもいろいろな血を外部から入れようということで、私も日本政治史を担当し、大隈重信を論じさせていただけるようになりました。時代は変わったと感じます。

最初に、昨日の朴先生の『引揚げ文学論序説』に関して行われた討論を聞きながら、自分なりに感じたことをベースにして、きょうの発表をしたいと思います。

1番目は、帝国史としての東アジア史という観点から日本と韓国の近代史をどう見るかという問題です。東アジアの近代史をどう見るかという問題ともいえます。2番目が戦後という時代のバイアスゆえに、なぜいろいろなものが見えなくなってしまったのかという問題です。これは、反戦と反支配という2つの大事な価値があるのに、反戦のほうが前面に出てきてしまったのはなぜなのかという昨日の問題にも係わります。3番目が、一般の日本人をとらえるというのは、なかなか公文書とか外交資料では難しいわけですが、文学というのは普通一般の人たちを歴史の材料としてとらえる有力な方法であること、それがゆえに今の我々が抱えているような歴史問題をめぐる衝突を乗り越えるトランスナショナル・ヒストリーの可能性を持っている点です。4番目が、実証主義という方法論の問題と大きな歴史の潮流を論ずることとの関係です。

最初に、大きな歴史枠組みを、朴先生がどういうふう提示しているかという1番目の問題です。『引揚げ文学論序説』の前半には、20世紀初頭に夏目漱石が執筆した「明暗」などを材料に、「朝鮮に落ちていく」という表現が、当時しばしば使われていたことに注目されています。その時代は大都市東京が急速に膨張した時代でもありました。その中で貧困というものを抱えている一般庶民が主人公になって、行きたくはないけれども朝鮮に落ちざるを得ないとか、一緒に行ってくれる奇特な夫人がいればいけれども、自分は奥さんも持てないとか、そんな話がたくさん出てきます。これは日本が近代国家として再編されていく中ではじき出された人たちといえます。

それを漱石は文学の素材としてとらえましたが、実は社会主義的な問題提起を行っているんじゃないかと、昨日、朴先生は言ってらっしゃいました。私も漱石の問題意識の中には、時代への感受性だけではなく、幸徳秋水の思想と通じる格差や貧困の問題というものがあつたと思います。それを文学という手法で表現したのが20世紀初頭の漱石文学であるという位置づけは大変に魅力的です。私としては、日本人対韓国人という枠を超えて、「日本人」という集団自体も実は作られているという前提に立って、日本が近代国家としてつくられていく中ではじき出された人たちが植民地に落ちていったという構図に注目する必要があると思います。植民地

へと「落ちていく」非定住者と、日本内地に残ることができ、結果として帝国を支え一般の生活をしてきた定住者たち、その中心と周辺のコントラストを漱石がとらえた手法で朴先生が拾い上げたものこそ、『帝国の慰安婦』であったのではないかとさえいえるのではないのでしょうか。

2番目に出てくるのが、植民地社会の中で落ちていったはずの日本人が今度は大変に良い生活を保障され、そこで上層の階級となり、そのことでその上層の下に、今度は現地の伝統社会の人たちが、両班も中人も奴婢たちも関係なく、みんな朝鮮人という形で組み込まれていったことを暗示する小説です。丘の上のほうには日本人が住み、丘の下には朝鮮人が住み、洪水になると丘の下のほうだけが流されて、でも洪水に対する支援物資は丘の上の方にだけやってくるという構図です。朝鮮人の女中さんをたくさん雇って日本人が見栄を張るという構造の中で、「日本人」、「朝鮮人」というカテゴリーがつけられていく。こうした構造というのは、「社会」や漱石の言う「世間」とも言い換えて良いと思うのですが、実は得体の知れない恐ろしさを持っています。それを認識した主体こそ、当時の少年世代です。構造にはまってしまう大人の視点とは別に、まだはまってはいないが故の鋭敏な感性で、その恐ろしい構造をとらえたわけです。

二世という言葉が出ましたけれども、要するに、植民地社会の中で世代というものが入れかわって、落ちていったはずの日本人がやがて老人となり、その老人のもとで育った少年たちが、敏感な感性で社会の中に埋め込まれている差別というものをとらえていったのです。

少年こそが、夜の中で声を上げることができ、その夜の恐ろしい非人間的な抑圧の構造を感じていたことが、植民地文学を起動させる重要なカギとなっているという指摘ともいえるでしょう。永興という元山の近くの小さい町が、少年だった後藤明生の故郷として登場しますが、コミュニティの中で、朝鮮人と日本人が交じり合っ、それぞれの稼業というものを持ちながら一緒に共存しているという状況の中で、何か厳然とした差別の構造があって自分が日本人として生きざるを得ないことを認識させられ、支配の側の人間だということを意識させられる場面がでてきます。植民地社会がどういう形で朝鮮社会を組み込み成立し、その中に複雑な重層的な構造ができ上がり、小さなコミュニティである「町」の現実の生活の中にも影を落とすのか。それはジェンダーとか身分とか、いろいろなものによっても影響されますが、大人がそれを意識しない一方で、少年たちの若い感性は、それを繊細にとらえ、煩悶するといえるでしょう。

3番目として、そうした構造をはらんだ植民地が歴史の舞台から消え去る際の、日本人がその家族と共に非常にみじめな姿で永興という町を引き揚げていく場面も印象的です。日本人の被害者体験が、戦後日本社会内部では抑圧されてしまって、余り語られないがために、今度は朝鮮社会に対する嫌悪の下地になったのではないかという主張にもはっとさせられました。日本人が引き揚げていく過程では、助かろうとするあまり、弱い立場の女性を現地の人に差し出したり、同じ家族の中で食糧を奪い合ったり、内輪もめや加害体験がいろいろありました。そうしたタブーを破った存在も、当時の少年でした。やがて歳をとって30年、40年して五木寛之や、なかにし礼などの小説家が生まれることで、何十年かして初めて語れるようになってきたわけです。同時に、彼らの語りの中には、淡い初恋としての故郷というものも登場します。呼び覚まされる記憶というのでしょうか。そうした要素こそ、引揚げ文学を構成するものだという位置づけが行われています。

また、引揚げ文学が意識されないことによって、日本でも韓国でも、本当の連帯のための努力が行われず、「つるつる」した民族主義ばかりになっているという言葉も気になりました。どこに出てきたのか、正確には不明ですが、慰安婦問題とも関連して気になっています。全てが国民という抽象的な集団の間の摩擦、矛盾に還元されてしまい、本来的に存在したはずの重層的な植民地社会内部の矛盾が一切消去されて見えなくされたまま、民族対民族の支配抑圧というものだけが強調される状態こそ、「つるつる」した民族主義同士の摩擦といえるでしょう。

一方的に日本側だけに態度の変更を迫るような韓国の民族主義と、植民地についての記憶の一切を忘却して、知ることさえもしないような日本の民族主義は相似形で、実は、お互いに陰で見えない相互作用をしながら生まれてきたのではないのでしょうか。そういう意味でも「つるつる」した民族主義が併存する時代だからこそ、引揚げ文学は、30年から40年という時間を経て、かつての少年たちによって再び世の中に出現したといえるのではないのでしょうか。そんな時間的構造も本全体として意識されているのではないかと思います。

植民地帝国の時代と、それを前後する時代に合わせて3つの時代を貫くのが、貧困と豊かさという格差の問題と、民族間の連帯に対する支配という問題だと思います。私は『帝国日本の植民地法制』という本を、「法域」の誕生や編成を機軸として政治外交史と法制史を融合させた本として書きましたが、引揚げ文学は別の角度から、この二つの問題を照射していると思います。つまり、朴先生が言われた「はじき出される日本人」は、帝国が形成されていく時代において、国民がダイナミックに連動しながら形成されていった構造を示すものです。当時は、帝国一般というものが国際関係の主体として一種のユニットを形成していて、そのユニットに合わせて明治日本が帝国に生まれ変わっていったわけですが、国内が国民の社会に編成され大都市東京がその中心に作られていく中で、余計なものとして「はじき出された」存在が植民地に出ていき、植民地の upper 社会を形成していくというダイナミズムがありました。

国際環境を編成する帝国は、清朝が崩壊したあとの中国や、王朝になりかわった朝鮮総督府が置かれた朝鮮で、その現地社会に影響力を拡大していきました。また、帝国が解体されたあとの時代に、我々は生きていますが、帝国の解体後にどういう社会がつけられていったのかを教えてくれる存在こそが、引揚げ文学なのだと思います。こうして時代を3つに区分しながら大きく歴史をとらえることで、初めて何が歴史の教訓として、あるいは和解のために重要なかということが見えてくるというふうに思います。

「法域」という言葉が非常に大事なキーワードで、これも朴先生が取り上げてくださっていますが、要するに落ちていった日本人が有利にその社会の中の「丘の上」を占められるような構造を生み出したのが、法域でした。そして親族や相続という極めて日常的な生活の核心部分の法令が、法域で区切られていて、人間を公的な領域でも差別していました。その法域は、やがて民族的同化によって消滅していくと言う前提で、帝国法制は組み立てられてはいましたが、実際には、それが差別を正当化する根拠となったのです。そうした法的な空間がいかに構成されていたのか、法域というものがどんなものだったのか、また法域と法域とをまたいで人間が移動するときの手続きはどうだったのかという問題を、私は歴史研究としてやってきたわけですが、植民地文学は一般の庶民がいかに法域をまたぎながら生きていたのか、法域を超えて移動するとき、どのような感情が喚起され、それが差別や抑圧、果ては、誇りや自信などの感

情を生み出し、その後の時代を變成していったのかに注目するものだという気がします。立体の円錐をとらえたときに、上から見ると丸に見えて、横から見ると三角に見えますけれども、やはり同じように歴史学が上から見るとすれば、横からしか見えないものがあるわけです。文学は私から言わせると横から見もので、人々の個別の人生に深く根ざした感情や人間性を照明するものであるという感慨を新たにしました次第です。

次に、2番目の豊かさ対貧困、そして平等・連帯対差別・支配という話にいきます。

反戦という価値のみが戦後日本では前面に出てきてしまっていて、反支配というものに向き合っていないという指摘が朴先生の本の中にたくさん出てきます。なぜなのかという、自分なりの答えなんですけれども、要するにアメリカによる占領の中で、民主主義や豊かさのアンチテーゼとして戦争というものがとらえられたからだと思います。反戦・平和・民主主義というものが豊かさとは結びつけられたわけです。逆に反支配という価値は、反米、つまりアメリカに対する反感や復古的なナショナリズムと結びついてしまっていて、そのために「反支配」のほうは余り強調されなかったように思います。今こそ、引揚げ文学の復権を通じて、我々の認識には、戦後という時代によってどういうバイアスがかかってしまったのかを意識してとらえ返しなから、深く考察する必要があると思います。また、反戦という価値が民主主義、ひいてはアメリカと結びついて非常に重要視されるようになった一方で、逆に反支配という価値が反アメリカと結びつけられてしまったことで、後者がますますタブー視され封印された過程にも注目する必要があるでしょう。

そのヒントとなるのが石堂清倫という人です。彼は引き揚げるまでの2年間ぐらい、満州の大連で暮らしています。つまり、アメリカ的な民主主義ではない、別の民主主義を、しかも日本人と中国人が依然として交じり合うポスト帝國的な社会の中で体験したわけです。石堂の残した体験記は、民主主義と豊かさというものの関係を考える上で非常に大事な資料です。ちょっと紹介しますと、対等な民主主義の立場に立つ新しい権利ができて上がるまで、大連に残った日本人の間では、民主化というのは何一つとってみても失うばかりだという被害者感情が高まったといいます。今までのように中国人をアゴで使えない、二言目にニーヤ、これはお前とかあなたという意味ですね。ニーヤという言葉が喉元まで出かけるのを一々抑えなければならない、収入が減ってくる、居住地域が制限される、差し当たり損なことばかりだ。民主主義とは経済的に奪われる損なものという気持ちが先に立つ。さもないと民主主義とは何をされても泣き寝入りする意味だとさえ受け止められた。これに比べると中国人は一時が万事解放であり向上であったと石堂はとらえました。民主化は日常の利益とも一致していたが故に、中国人は日本人に比べると目覚ましい勢いで民主化していった。それが日本人にはしゃくの種となったともいいます。本当の「中日提携」を確立するにはこの間隔を小さくし、日本人の民主化のテンポを速める必要があったものの、日本人の民主化は激しい内面的葛藤、闘争を伴うことなしには進歩しなかったとまで書かれてあります。

また、マッカーサーからは、ポーレー使節団という賠償使節団が来た際に、戦後日本の焼け残った工場設備を解体して、大連とか北朝鮮に運んで現物賠償しなさいという、そういう勧告が出されたのですが、その際のエピソードも、民主主義と経済的豊かさの関係を示唆しています。マッカーサーは、実は、この現物賠償政策に反対で、その実行をワシントンの意思に逆らってまで

抑えようとしていました。なぜ抑えたかという、焼け残った機械や設備というのは戦後日本の復興にとっては非常に大事な設備なので、それが取り去られてしまうと日本人が動揺してしまって占領のコストが増大しかねないためでした。つまり日本人が占領下で民主主義を受け入れ始めたのは、民主主義とは豊かさに直結しているという素朴な信念を前提としているとマッカーサーは見抜いていたのです。それなのに、機械設備が持ち去られて、日本の戦後復興が遠のけば、恐らく占領に対する反抗が出てくるであろうとして、マッカーサーは賠償による工場設備撤去に反対したわけです。つまり民主主義や平和というアメリカの持ち込んだ価値が、経済的豊かさというものと直結しているというふうに日本人が信じたがために、民主主義や平和、そして反戦という価値が非常に重要視されて、逆に反支配というのは、まさにアメリカに対する反抗を意味するようになったといえるでしょう。

目の前で直面しているアメリカ対日本という権力的な状況は、かつて日本が支配者だった時代の日本対アジアの支配への反省にはつながらず、かえって、アメリカのもたらした豊かさと平和・反戦との価値の結合をもたらしたといえるでしょう。

「連帯」の逆の「支配への反省」というものが抜け落ちていったのも、占領という時代の一つの構造であったと思います。もう一つのファクターとしては、アメリカ自体が帝國的なソフトパワーだったということも関係している気がします。つまりフィリピン人を沖縄支配に使ったりしたのみならず、ハワイ、プエルトリコ、アメリカインディアンを支配する過程では、その支配が支配ではなくて、人間の解放なのだということにして、個人を主体と見る民主主義を理念として、人種的な支配の構造がソフトに覆い隠される構造があったように思います。日本の占領に際しても、それは民主主義を広めるためだということで占領のいろいろな問題が一切検閲でもって見えないようにされていました。アメリカ自体が帝國的な側面を持っていたことで、その占領下において日本人がみずからが帝国であったということの記憶が忘却されていったようにも思います。

「つるつるした民族主義」もなかなか非常にいい表現です。これは小林勝に対して唯一応答した韓国人の言葉として出てくるんですけども、日本人だけが変わるべきだと要求している韓国の典型的な民族主義的な言説の中であって、唯一、応答になった例だとされています。つまり、つるつるした民族主義というのは、国家や国民を基軸とする歴史観以外を全部捨象してしまうものです。捨象されていない部分に注目して、民衆を主体とした個々人の人生がいかに絡まり合って展開したのかという歴史こそが、トランスナショナル・ヒストリーだと思いますけれども、そういうものが文学という手法によって再生される道が開かれる気もします。直接体験をもたない世代の反日ナショナリズム、嫌韓ナショナリズムを、根底から組み替えるカギが、そこにあるような気もします。

トランスナショナル・ヒストリーの可能性こそが、新しい未来の連帯の可能性を開くものでしょう。昨日、西先生がおっしゃったことですが、帝国主義への反省と、反省を前提とした韓国民族主義への批判、それを二つ同時に「日本人」が並行して行うことができる回路や視点を開拓しないといけないと思います。帝国主義の反省を歴史の教訓として共有しながらも、日本民族主義を韓国人が非難し、韓国民族主義を日本人が非難し、相互に戒めあう。しかし、帝国主義時代に、二つの国民が集団として区別され、どのような不均衡な関係にあったのかも

忘れない。帝国主義への反省を、現代の新しい「我々」として直接体験者とは異なる意味で共有しつつ、新しい我々意識を育てていくことが大切だと思います。私は共有しながら新しい意識をつくり出していく可能性があると思うんです。それは民族主義自体が反日民族主義として作られてきたがためです。反日民族主義ではない別な民族主義のあり方の追求ということにもなると思いますし、日本の文脈で言えば、反西欧や脱アジアではない異なる民族主義の可能性を問うことになるでしょう。ゆえに、帝国主義を反省しつつ、反日的な民族主義、または反韓的な民族主義、それを批判する可能性が追求されなければならないと思います。民族主義をそういう反「何者」という形の民族主義ではない形で開いて、隣人としての結合の可能性を持ったものに再編していく、それがトランスナショナル・ヒストリーの可能性だと考えています。

その植民地への反省の一形態として、植民地近代性論というのが歴史家のほうで唱えられています。これは近代というものを明るいものとしてとらえるよりは、管理や抑圧と一体となった複合的なものとしてとらえた上で、近代的な要素が当時の時代の中でこういうふうに組み込まれ非常に歪んだものとして存在していたということに注目する語りということができるでしょう。植民地近代性論の語りは、個別の要素に還元していくという手法が多いように考えられるんですけども、構造としてとらえていくことが必要だとも思います。日本自体も明治の中でつくられ、その中からはじき出された人間たちがまた韓国に行って、また韓国の近代社会の支配者として君臨するという、つまりドミノ倒しみたいな形で、お互いもたれ合い、連携しながら括弧つきの近代化が進んでいったのが、前に指摘した帝国の構造そのものではないでしょうか。また、その中で育った新しい世代としての少年たちの鋭敏な感性が、植民地社会に潜在化する差別をとらえ、それが戦後日本社会の中で、引揚げ後、何十年かして発酵し芽生え引揚げ文学論を生み出したという構造にもつながるわけです。

長い時代を超越した歴史を語ろうとして、私が使ったのが「未発の可能性」という言葉です。歴史の中で実はこんな可能性もあったよ、あんな可能性もあったよというふうを書くのは、歴史のifの問題になってしまうので非常に微妙な、ある種タブーだということもあるんですけども、私の本の第二編では、朝鮮が保護国になってしまった段階でも、日本との地域的な結合の可能性は残されていたと言う主張を行っています。もちろんジュニアパートナーとしての格差は一時的にせよ残ったでしょうけれども、少なくとも主権をもった国際法上の法人格が残る形で、地域的な結合を行うという可能性が存在していたという指摘です。保護が失敗することで、全く別の選択肢が登場してきたことも指摘しています。すなわち、完全な併合という形で国家法人格も失ってしまっただけで吸収されるという可能性、実際に起こった選択肢です。

保護と併合という、本来的には全く別の二つの選択肢が存在していたにもかかわらず、実際には、前者は後者の前段階に過ぎない存在にゆがめられてしまったことは、法制史的な手法を使うと、歴史実証的に証明されると思っています。政治外交史的なアプローチも交えて、なぜにして後者が取って代わってしまったのかということ論じたのが、私の本の第二編ですけども、歴史の補助線として、未発の可能性を描くことは、非常に大事だと思っています。

文学という手法は、こうした様々な可能性を前提としてこそ、初めて多様な人生のバリエーションを見通せるのではないかと、同時に、文学的手法からこの種の補助線がよみがえること

があるのではないか、あれこれイマジネーションを広げさせていただきました。

最後に4番目、実証主義的な分析と大きな歴史枠組みとの関係の問題です。これは歴史とは何であるのか、また、文学は歴史の材料として使えるのかどうかという、きのう中山さんが提示した問題ともかかわります。歴史実証主義的に歴史の資料が存在する範囲でしか語れないとすると、かなり言いたいことは制約を受けます。禁欲的に語ると、ほとんど何も語れない、語ってはならないということにもなります。かつて唯物弁証法に象徴される、歴史の大理論がぶつかった時代、ある種の国内冷戦的な状況の中で、われわれの師匠に当たる歴史家は育ち、自らの問題意識やスタンスを固めていったのだと思います。しかし、大理論が消滅した後になっても、実証の対象の選択や、その最後の意味づけにおいては、かつての大理論全盛の時代に作られた態度や意識が、我々の中に検証されないまま無意識的に残っているように思います。実証研究は、そうした我々の内部に存在するものを、もう一回反すうして、自分自身の前に対象化するためにあると思うのですが、むしろそうした態度や意識に合うものが好んで選ばれてしまう傾向がないでしょうか。

帝国主義の抑圧と支配に対応する現象ばかりを実証研究のポイントとしていても、未来の新しい関係は見えてこないように思います。帝国という大きな社会構造を歴史的に把握するために、「業者」がその典型ですけれども、「協力者」という存在にも朴先生は分析の焦点を当てました。また、植民地社会の複雑な重層的な構造を理解するために、家父長制、業者、官民関係、警察制度などにも今や注目が集まっています。朴先生の『帝国の慰安婦』をめぐる問題が、そうした歴史の視点を深めてくれたといえるでしょう。

また、永興という小さな町で、日本人と朝鮮人が共存していたコミュニティーの様子が書かれていましたけれども、共存しながらも厳然たる差別が存在するような社会状況をとらえるためには、実証研究としてどこにボーリング、つまり歴史の対象を絞り込む作業を行うべきかという問題があります。朴先生が『帝国の慰安婦』と、またそれに続いた『引揚げ文学論』で打ち出されたのは、「もたれ合う」近代の構造です。私の言う「ドミノ倒し的」な近代の重層的な構造ともいえるでしょう。それを認識できてこそ、帝国主義への反省を共有しつつ、互いの民族主義を戒め合い、よりよい未来の建設、別のことばで言えば、我々の時代が抱えている問題を克服していくことができるのではないのでしょうか。

それは、戦後や冷戦という時代、民族主義全盛の時代には封印されていた事象を正面から見つめた、より総合的な歴史の枠組みを作り出す問題だとも思います。我々が当然とみなし、また、自らが研究者になる過程で吸収してきた価値そのものを、歴史の産物としてとらえ返すための手法や力量が求められていると思います。植民地文学への接近は、その手法の開拓に貢献することを疑いません。私自身も大いにそれを参考にしていきたいと思います。せっかく実証分析をやったのに、最後の結論が、結局帝国主義に対する同じような「戦後」的な認識枠組みに回収されていくだけという歴史研究ではさびしいです。むしろ、枠組み自体を新しく構築し、現代のグローバル化に対応した感性に立脚したものへと進化させていくことが必要で、そのために大事な問題提起を朴先生はされたと感じています。

